

葛藤場面に対する道徳的態​​度調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大平, 勝馬, Ohira, Katsuma メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00005271

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



葛藤場面に対決する道徳的態度調査

大 平 勝 馬

目 次

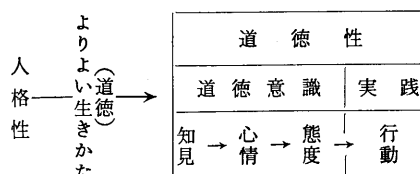
1 研究の意義	126頁
2 研究目的	126
3 研究手続	127
4 研究結果	129
(1) 問題別考察	129
(2) 個人別考察	132
(3) 信頼性・妥当性の検討	133
5 要 約	135

1 研究の意義

道徳教育がうちだされたひとつの根拠として、急増する青少年非行化が考えられたようであるが、現在の道徳教育がこの大きな期待にいかにかたえうるか。これは今後ながい目でながめなければならない問題である。また道徳の時間特設にたいしても、いまなお賛否両論あるが、その両者の論拠はともかくとして、この時間を道徳性形成にいかにか効果的に活用するか、その方法は心ある現場教師の悩みのたねになっている。

道徳教育のねらいは、現実の生活場面に対処して、みんなと共に幸福によりよく生きるような道徳性を育てていくことである。しかもこの道徳性は実践行動をその本態としている。もしこの本態にもついで、道徳教育のねらいが十分に達成されるならば、やがて非行は減少するはずだし、世の中はもっと明るくなるはずである。しかし私のささやかな調査(1)(2)によっても、必ずしも明るい見とおしは与えられない。道徳的知識はすすみ判断は高まるのに、一向に実践がそれに伴わない現状が明示されているのみならず、その“ずれ”は学年とともにいっそう増大しているのである。このような意識と実践のずれは複雑な要求や衝動をもちながら、現状のような社会環境下で生きている人間に自然であり、当然なことかもしれない。しかし、道徳性形成に努力している教育者としては、自然だからと傍観してよい問題ではなく、その根拠を探究し、それは現在の道徳教育あるいは教育全般にいかなる欠陥を蔵しているためであるかを十分反省し、そのずれをせばめるように努力する必要があるように思われる。

道徳教育のねらう道徳性の意義や構造について詳論はさけるが、道徳性は全体としての人格性が道徳に関与した面の特性であり、内面的な道徳意識(道徳的知



見一規範意識、道徳的心情、道徳的態度)と、外面に現われる実践行動をふくめたものと考えたい。したがって道徳性の本質的な形成過程、とくに最近やかましくいわれている内面化の過程は、現実的な問題に対する知見が高められるにつれて、心情とくに道徳的情操が豊かになり、これを強い動機として態度形成にまで到達させるとなみが、人格的に統合されることであると考える。つまりところ内面の道徳意識が実践化する程度は、知識×動機によって態度化される程度によるものと思われる。このような態度化がほんとうに進められなければ、いかほど知識・理解が高まろうとも、実践につらなるものとはなりがたいし、道徳教育の成果はあまり期待できない。

道徳的態度は道徳的实践にむかう内面的傾向性あるいは準備態勢に実践意欲を含んでいるものであるが、現代の道徳教育をうけている青少年においては、知識・理解が進むに伴って態度化も向上しているだろうか。これは個人差の見地からも、発達の見地からも、検討してみる必要のある問題と思われる。このような検討は、青少年のもつ道徳性の特質を理解し、道徳教育への反省資料をうる上に意義深いことである。

2 研究目的

本研究では、前述のような意義をもつ道徳的態度を調査する問題を構成し、その問題の各具体的場面に対して児童生徒がいかなる反応を示すかを調査するとともに、その反応から、葛藤場面に対する道徳的態度の個人差および発達傾向を考察し、さらにすすんで本調査結果の信頼性、妥当性の検討を行いたいと思う。ただし発達の傾向を中心とする方面は、寺井亮三君が研

究をすすめているので、この方面の考察は同君にゆずり、筆者の目的から割愛する。

3 研究手続

1 調査問題と回答用紙

上述の態度調査を実施するために作成した問題および回答用紙の形式は、次に掲げる通りである。50問題それぞれは、内面に葛藤を感じずような道徳的場面を選び、それらの場面には友情、忠誠、責任、正直、道徳的勇気の中のいずれかの道徳規範が含まれている。これらの規範を含む問題の配列は、1. 友情を含む問題、2. 忠誠を含む問題、3. 責任を含む問題、4. 正直を含む問題、5. 道徳的勇気を含む問題の順序で、これを10回くりかえすようにした。したがって、それぞれの規範を含む問題10題ずつから構成されている。調査のしかた（態度回答のさせかた）は、リッケルト尺度 Likert-Scale によったもので、次の問題前部の手引に示した通りである。

道徳的態度調査問題

手引 あなたのところに、50問題を述べたこの問題用紙と答案用紙をくばってあります。この問題用紙の中の問題番号は、答案用紙の番号と対応しているのです。

次の問題を、じゅんじゅんに読んで、答案用紙に書いてある番号（問題用紙と同じ番号）のところの同意 少し同意 わからない 少し反対 反対 のうちのどれかを○でかこんでください。

つまり問題1に述べてあることを読んで 答えは、
答案用紙の1のところのどれかに
問題2に述べてあることを読んで答えは答案用紙の2のところのどれかに
というように、○をつけていくのです。

その時

もし問題の述べていることに全く同意すれば→
(同意), 少し同意, わからない, 少し反対, 反対,
もし問題の述べていることに少し同意すれば→
同意, (少し同意), わからない, 少し反対, 反対,
もし問題の述べていることにどう感ずるかきまらなければ→

同意, 少し同意, (わからない), 少し反対, 反対,
もし問題の述べていることに少し反対であれば→
同意, 少し同意, わからない, (少し反対), 反対,

もし問題の述べていることに全く反対であれば→

同意, 少し同意, わからない, 少し反対, (反対),
のように○をつけてください。

それぞれの問題には、ひとつの○だけをつけなくてはなりません。

すべての問題に答えてください。

ひとつの問題にながくとまって考えないようにして、次々にすすんでいきなさい。

これをすませるのに、今からだいたい20分ぐらいかけなさい。

問題

- 1 友人が、あなたを怒らせるような不親切なことをしたとしても、あなたはその友人に、不親切なことをいってはならない。
- 2 たいそうつかれているとか、忙しいとか、あるいはたいへんたいせつな仕事がある時でも、学校の試合をやすむことは、学生や生徒としてはゆるぎない。
- 3 仕事をひきうけたときは、それをしあげることを困難にするような何かがおこっても、その仕事をしあげなくてはならない。
- 4 正直は最もよい生活のしかたである、といわれているが、実際の生活では、ほんとうに正直であるからといって成功するとはかぎらない。
- 5 悪いことだと知っているが、あなたがやりたいと思うことであり、しかも他人も行っているならば、あなたもそれを行ってかまわない。
- 6 忙しい仕事をしている人であれば、知らない人に親切な行いをすると期待できない。
- 7 もし、あなたが選んだ委員長の考えや仕事のすすめかたと、あなたの考えとが、ちがっても、あなたは委員長の考えをよくきいてそれを助けてあげなくてはならない。
- 8 自分では、できそうにないと思うことを先生からたのまれて、あなたがそれをひき受けた時は、あなたはその仕事のできる友人にしてもらう方がよい。
- 9 あなたが、あまりねうちのない物をひろった時、その所有者をさがすのに時間をつぶすことはばかなことである。
- 10 たとえあなたの忠告がいやがられるとしても、その人の行いがまちがっておれば、あなたはその人に忠告することをちゅうちょしてはならない。
- 11 自分の失敗のために悲しんでいる人を元気づける

- ために、時間をつぶすことは、忙しい者にとってはおろかなことである。
- 12 学校に一定の規則があり、それがいかにもばからしいと思われたり、それをまもる必要がないと思われるような場合でも、学生や生徒としてはそれに従わなくてはならない。
 - 13 仕事のおわる時間がきて、早く遊びに行きたいと思う時には、あなたの今している仕事が完全にすんでいなくても、その仕事をやめることはあたりまえである。
 - 14 われわれが生活していく上に、あることは自分にとってたいそう重要であるから、それを自分のものとするために、少しくらい人をだましてもしかたがない。
 - 15 人が他人について真実でない批評をしているのを聞いた時は、自分にどんなことがおこるとしても、あなたはその人に反省をもとめなくてはならない。
 - 16 あなたの友情とあなたの授業とを、同時に十分にはたす時間がない時には、あなたは友情よりは自分の授業をきせいにしなくてはならない。
 - 17 学校でみんなで作る行事でも、それに興味をもたない生徒は、欠席して自分の勉強をしていても、それを非難すべきではない。
 - 18 学校からかなりむづかしい調査をいつけられた時、おとなの助けがほしいなと思う時でも、自分の力でそれをしあげなくてはならない。
 - 19 あなたが試験の答えを知っているが、ほんの少しのところを思い出すことができないならば、となりの人の答えを見てかいてもかまわない。
 - 20 学校で、学生や生徒の権利がみとめられず、ある者に対して不正がなされているような状態である時には、もしあなたがそれに抗議した場合、あなたがなにかそんをするとしても、あなたはそのことに対して抗議すべきである。
 - 21 よいわるいについての考えや意見が、たいそうちがう友人であっても、その友人と親しく話しあうようにしなくてはならない。
 - 22 自分がはいつているクラブをよくするために、みんなの気にいらぬことでも、よいと思うことをどしどしのべて、みんなからうるさい人、いやな人と思われるようなことはしない方がよい。
 - 23 もし教室が不整頓になっていても、それが自分の責任でなければ、不整頓な教室を整頓しなければならぬと考える必要はない。
 - 24 人の物を盗むくせをもっている者がいる時、その人があなたの知人であっても、あなたはそのことを先生に報告すべきである。
 - 25 あなたの同級生のほんの僅かの者しか行かなければ、日曜日になにかの社会的奉仕作業に行くことを、ことわるのはあたりまえである。
 - 26 旅行している時、もし手紙をかいていると、ある興味あるところを見そこなうような場合でも、あなたの友人へ手紙をかく時間をもつべきである。
 - 27 忙しい人は、自分がはいつているクラブに利益はあるが、自分に利益のない仕事をするを、ことわる権利をもっている。
 - 28 学校や先生を助けるために、いくらかいやな仕事でも、たのまれたことを進んでしない生徒は学校のよい生徒ではない。
 - 29 何か自分の用事で、学校で命ぜられた仕事に行くことができない時、自分が病気であると、おかあさんから先生に電話をかけてもらうのはよくない。
 - 30 その友人が、たとえ自分によくつくしてくれる友人であっても、もしその友人とつきあっているために、自分の評判が悪くなるようであれば、その人の友情をすてるべきである。
 - 31 会合において、たとえあなたの友人としたしく話しあうことができなくても、見しらぬ人が気もちよく感ずるようにしなくてはならない。
 - 32 クラブの会員が、その会合にあまり出席せず、あまり熱心でない時には、そのクラブが価値あるかどうかにかかわらず、そのクラブで熱心に働くべきではない。
 - 33 もしあなたが家庭や学校で、しなければならぬことを見たとしても、それをするようにあなたがたのまれないのに、することはばかげたことである。
 - 34 あなたが父母と約束した時間に一時間おくれて帰ってきたけれども、まだ父母も帰っていないければ、自分はちょうどの時間に帰ってきたと父母に話してもわるいことではない。
 - 35 あなたの親友が、あなたが信じていることとちがう考えをもっている時、その親友に、あなたの考えを話すことをちゅうちょしてはならない。
 - 36 家族の中にあなたと仲よくない者がいても、家族の人みんなと仲よくするためには、あなたのわがままをおさなくてはならない。
 - 37 あなたのホームや学級の者が、あなたが協力しない知っている なにごとかをしようと きめたなら

- ば、みんなに協力することをことわる権利がある。
- 38 学校のために働くことが必ずしも必要でない時でも、仕事があれば、家の収入を助けるような放課後の仕事をやめても、学校のために一しょうけんめいに働くべきである。
- 39 もし母親がそれをとるのをゆるさないことが確かであれば、家庭で菓子、料理そのほかの食物をとることはわるいことである。
- 40 あなたが、それは人に話すことはよくないと、信じているような、いやらしいみだらな話でも、それを聞くことはけっこうである。
- 41 あなたの家で勉強のじゃまになる時には、親しい友だちがたずねてきても、その友だちに親しく話すべきではない。
- 42 友人の困難を助けるとき、あなたにいろんな多くの困難がおこるとしても、友人の困難をみてそれを助けることを断るのは、ゆるされないことである。
- 43 あなたの家族が、あなたの援助をせひ必要とするならば、金をもうけるために学校をやめることをすすんでしなくてはならない。
- 44 家族の幸福をつづけ、争いをなくするためには、あなたがしていることのうちで、家族に心配させな

- いような一部だけを、家族に話すのが最もよいことである。
- 45 たとえその人をあなたがすきでなくても、すべての人の権利をまもるようにつとめなくてはならない。
- 46 あなたは、家庭の争いとか、家族の困難については、親しい友人にでも話すべきではない。
- 47 もし、家族に対する批判が、いくらか真実であっても、その家族への批判を弁護するのはあたりまえである。
- 48 父親の俸給で家族を養うことがむづかしいとわかると、高校生頃なら学校の成績が多少さがり、学校の活動をあきらめねばならぬとしても、家の収入を助けるような仕事をすすんでやるべきである。
- 49 あなたの家族を、友だちによく思ってもらう必要があれば、自分の家族についてわずかばかりおおげさに話すことはかまわない。
- 50 その仕事がどんなことであっても、あなたがまちがっていると思う仕事を、雇主があなたにするようにたのんだならば、あなたはそれをことわるべきである。

回 答 用 紙			
		調査年月日 年 月 日	
		生年月日 年 月 日	
..... 学校	 学年 (男・女) 氏名.....	
問題番号	同意か反対か	問題番号	同意か反対か
1	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対	26	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対
2	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対	27	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対
3	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対	28	同意 少し同意 わから 少しい 反対 反対
⋮		⋮	

2 調査対象

金沢市内中学校 2年生男93人、女61人、計154人。

3 調査時期 昭和36年3月上旬

4 研究結果

前掲のような50の問題場面に対して、各被験者が自らの態度を表明した資料にしたがって、(→)まず、各問題場面に対する全被験者の態度傾向を、問題別に考察

し、(⇒)次に、各被験者別に、全問題場面に対する態度を考究し、(⇨)最後に、他の資料との相関的考察を行って、調査結果の信頼性、妥当性を検討した。それらの結果の概要を次に述べよう。

(一) 問題別考察 (各問題場面に対する全被験者の態度傾向)

1. 各問題場面に対する被験者の回答は、同意、

やや同意, わからない, やや反対, 反対のいずれかに対してなされたのであるが, 結果の煩雑さをさけるために, 同意+やや同意, やや反対+反対により, 同

意, わからない, 反対の三尺度として, 全被験者の各問題別回答状況を比率で表示したのが Table 1. である。

Table 1. 各問題場面に対する全被験者の回答状況 (%)

問番 題号	男			女			計			問番 題号	男			女			計		
	同意	未定	反対	同意	未定	反対	同意	未定	反対		同意	未定	反対	同意	未定	反対	同意	未定	反対
1	69.9	8.6	21.5	81.9	0	18.1	<u>74.7</u>	5.2	<u>20.1</u>	26	68.9	16.1	15.0	44.3	31.2	24.5	<u>59.1</u>	22.1	18.8
2	40.9	17.2	41.9	52.5	26.2	21.3	<u>45.5</u>	20.8	<u>33.7</u>	27	18.3	21.5	60.2	9.9	24.6	65.5	<u>14.9</u>	22.7	<u>62.4</u>
3	69.8	10.8	19.4	85.3	4.9	9.8	<u>75.9</u>	8.5	<u>15.6</u>	28	76.4	9.7	13.9	86.8	1.6	11.6	<u>80.5</u>	6.5	13.0
4	69.9	12.9	17.2	77.1	9.8	13.1	<u>72.7</u>	11.7	<u>15.6</u>	29	58.1	8.6	33.3	59.0	9.8	31.2	<u>58.4</u>	9.1	32.5
5	5.4	4.3	90.3	4.9	6.6	88.5	5.2	5.2	<u>89.6</u>	30	29.0	14.0	57.0	42.6	14.8	42.6	<u>34.4</u>	14.3	<u>51.3</u>
6	18.3	25.8	55.9	24.6	18.0	57.4	<u>26.8</u>	22.7	<u>56.5</u>	31	68.8	16.1	15.1	78.7	9.8	11.5	<u>72.8</u>	13.6	13.6
7	66.6	1.1	32.3	68.9	11.5	19.6	<u>67.5</u>	5.2	<u>27.3</u>	32	6.5	9.7	83.8	11.5	6.6	81.9	8.4	8.4	83.2
8	21.6	3.2	75.2	11.5	9.8	78.7	<u>17.5</u>	5.8	<u>76.7</u>	33	8.6	10.8	80.6	4.9	8.2	86.9	7.1	9.7	83.2
9	25.8	16.1	58.1	16.4	9.8	73.8	<u>22.0</u>	13.6	<u>64.4</u>	34	17.3	8.6	74.1	19.6	1.6	78.8	18.1	5.8	76.1
10	64.6	10.8	24.6	67.3	18.0	14.7	<u>65.6</u>	13.6	<u>20.8</u>	35	59.2	16.1	24.7	54.1	18.0	27.9	<u>57.2</u>	16.9	25.9
11	11.9	11.8	76.3	11.5	13.1	75.4	<u>11.6</u>	12.3	<u>76.1</u>	36	90.3	5.4	4.3	93.5	1.6	4.9	<u>91.6</u>	3.9	4.5
12	76.3	5.4	18.3	83.6	4.9	11.5	<u>79.2</u>	5.2	<u>15.6</u>	37	11.8	15.1	73.1	9.8	16.4	73.8	11.0	15.6	73.4
13	10.8	8.6	80.6	6.5	11.5	82.0	9.0	9.7	<u>81.3</u>	38	47.3	26.9	25.8	39.3	27.9	32.8	<u>44.1</u>	27.3	<u>28.6</u>
14	25.8	8.6	65.6	9.8	11.5	78.7	<u>19.5</u>	9.7	<u>70.8</u>	39	57.0	16.1	26.9	52.4	19.7	27.9	<u>55.2</u>	17.5	27.3
15	85.0	6.5	8.5	78.7	9.8	11.5	<u>82.5</u>	7.7	9.8	40	19.4	12.9	67.7	16.4	29.5	54.1	18.2	19.5	<u>62.3</u>
16	30.1	30.1	39.8	26.2	29.5	44.3	<u>28.6</u>	29.9	<u>41.5</u>	41	19.4	6.5	74.1	13.1	8.2	78.7	16.8	7.1	<u>76.1</u>
17	12.9	5.4	81.7	11.5	9.8	78.7	<u>12.3</u>	7.1	<u>80.6</u>	42	67.7	15.1	17.2	60.6	18.0	21.4	<u>65.0</u>	16.2	18.8
18	57.0	5.4	37.6	47.6	6.6	45.8	<u>53.3</u>	5.8	<u>40.9</u>	43	10.8	16.1	73.1	18.1	19.7	62.2	<u>13.6</u>	17.5	68.9
19	1.1	1.1	97.8	1.6	1.6	96.8	1.2	1.3	<u>97.5</u>	44	42.0	10.8	47.2	29.5	19.7	50.8	37.0	14.3	<u>48.7</u>
20	75.2	18.3	6.5	64.0	32.8	3.2	<u>70.8</u>	24.1	5.1	45	81.8	10.8	7.4	80.4	13.1	6.5	<u>81.2</u>	11.7	7.1
21	72.0	9.7	18.3	70.5	9.8	19.7	<u>71.4</u>	9.7	<u>18.9</u>	46	36.5	19.4	44.1	34.4	21.3	44.3	<u>35.7</u>	20.1	<u>44.2</u>
22	35.5	10.8	53.7	42.6	18.0	39.4	<u>38.3</u>	13.6	<u>48.1</u>	47	38.7	31.2	30.1	24.6	49.2	26.2	<u>33.1</u>	38.3	28.6
23	5.4	5.4	89.2	1.6	4.9	93.5	3.9	5.2	<u>90.9</u>	48	58.1	20.4	21.5	72.1	16.4	11.5	<u>63.6</u>	18.8	17.5
24	77.5	11.8	10.7	80.4	18.0	1.6	<u>78.5</u>	14.3	7.2	49	14.0	8.6	77.4	18.1	8.2	73.7	15.6	8.4	76.0
25	5.4	26.9	67.7	8.2	18.0	73.8	6.5	23.4	<u>70.1</u>	50	68.8	15.1	16.1	81.9	6.6	11.5	<u>74.0</u>	11.7	14.3

註：計の部の下線のある回答率が，望ましい態度を示す比率。

ただし Table 1. は申すまでもなく, それぞれの問題場面に対する同意, 未定, 反対などの回答そのままを集計した比率であって, 価値的立場から整理したものではない。与えられている問題場面は, 同意がすべて望ましい態度を示し, 反対がすべて望ましからぬ態

度を示すようにはなっていない。望ましい態度は問題によって同意回答の場合もあり, 反対回答の場合もある。したがって, 整理はさらに回答した態度が望ましいか否かの, 価値的な観点からしてみなくてはならない。この処理のために, 問題作成者の方で一応決定し

Table 2. 望ましい態度とする各問題の回答基準

問題番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
回答	同	反	同	反	反	反	同	反	反	同	反	同	反	反	同	同	反	同	反	同	同	反	反	同	反
問題番号	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
回答	同	反	同	同	反	同	反	反	反	同	同	反	反	同	反	反	同	同	反	同	反	同	同	反	同

ている判定基準が Table 2. である。この基準にもとづいて、回答した態度が望ましいか否かの立場から整理した全被験者の結果は、あらためて表示することをさけて、Table 1. 計の部にアンダーラインで示してある。つまり各問題場面に対して望ましい態度を示した者の比率が、アンダーラインのある数値であり、それがない数値は態度の未定か、望ましくない態度を示した者の数値である。男・女の欄についても、この計の部に相対応して同様にみてもらえばよい。そこで、すでに明らかなように、さきの Table 1. 各問題別の同意、未定、反対の態度を示す数値そのものは、各問題の具体的場面と対照しつつ考察するとか、同一問題で

調査した他の被験者の結果との比較、あるいは発達の考察をする場合にのみ意味をもつものであるから、この点の考察は本稿ではさし控え、以下、望ましい態度(+), 未定(0), 望ましくない態度(-)の観点から、Table 1. に基づいてすこしく考察しておきたいと思う。

2. 問題はすでに述べたように、番号順に(1)友情、(2)忠誠、(3)責任、(4)正直、(5)道徳的勇気の規範をくりかえし10回含んでいるので、これらの問題類型別に、まず回答比率を通して全般的傾向をみると、Table 3. のようである。全問題場面に対する(+)態度の回答は全員の65.2%, (-)態度は21.4%, (0)態度は13.4%

Table 3. 全被験者の態度別回答率 (%)

	望ましい態度 (+)			未定態度 (0)			望ましくない態度 (-)			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
友情	m	65.1	65.1	65.1	14.9	14.3	14.7	20.0	20.6	20.2
	σ	16.4	20.1	17.3	7.7	10.1	8.8	10.3	11.5	10.8
忠誠	m	64.4	59.7	62.5	13.2	18.5	15.3	22.4	21.7	22.1
	σ	14.8	22.1	17.7	8.4	12.1	9.9	10.9	13.9	12.3
責任	m	62.3	68.4	64.6	11.7	11.1	11.5	25.9	20.5	23.8
	σ	24.1	24.6	24.1	7.1	7.5	7.2	19.7	19.5	19.5
正直	m	63.6	65.7	64.1	10.3	11.0	10.6	26.7	23.3	25.3
	σ	20.6	22.1	20.6	4.1	6.2	5.2	18.2	20.2	19.1
勇気	m	71.7	68.5	70.5	13.5	16.7	14.8	14.8	14.8	14.8
	σ	10.5	14.0	11.4	5.9	8.3	7.0	8.7	11.5	10.2
計	m	65.1	65.5	65.2	12.8	14.3	13.4	22.1	20.2	21.4
	σ	17.8	20.2	18.9	6.4	8.6	7.5	14.4	15.9	15.1

となっている。前掲問題場面に対する、中学生の態度傾向を示すひとつの標準資料と見てよいであろう。男女間に若干の差がみられるけれども、有意性は認められない。しかし典型的にみた問題場面には、いくつか有意な差がみられる。たとえば、望ましい態度においては、道徳的勇気を必要とする場面に対する態度は、忠誠や正直の場面に対する態度よりも高く、望ましくない態度においては、その反対の傾向を示している。また態度未定においては、正直を含む問題場面に対する態度が、友情、忠誠、道徳的勇気を必要とする場面に対する態度よりも低いのである。これらのことから、正直は比較的(+)態度低く、(-) 態度高く、(0)態度低いのに対し、道徳的勇気は比較的(+)態度高く、(-)態度低く、(0)態度のかかなり高いことが認められる。ここに現代青少年の生活そのものからに

じみ出た道徳的態度の一端がうかがえる。勇気はあらゆる道徳的実践にかかわる倫理だと考えられるが、正直者が馬鹿をみ、正しさがやすやすと踏みじられるような道徳的風土の中で、かくあろうとしながら、ありえない自己をみつめ、よりよく生きることのむつかしさを彼等なりに考える時、道徳的勇気を志向する態度がよりつよくなるものと思われる。その他は表から読みとっていただくことにして、説明はさし控えよう。

3. 前項のように、全問題場面に対する態度一般の考察に加えて、この一般的傾向および前掲 Table 1. を資料として、児童生徒一般あるいは各個人が、各具体的場面に対していかなる態度をとっているかを考察することが必要であり、それは指導上参考になることも多い。次に被験者全体が示した具体的場面に対する

態度のうち、示された比率からみて問題となりそうな場面をとりあげて考察しておく。

Table 3. の $M \pm \sigma$ (65.2 ± 18.9 , 13.4 ± 7.5 , 21.4 ± 15.1) をひとつのめやすとして、Table 1. 問題番号別数値(計の部)をみていくと、平均から上下に偏差の著しい問題が発見される。とくに、(+)態度を示す比率が低く、(-)態度の比率が高い場面としては、問題番号2, 4, 16, 22, 38, 43, 44, 46, 47の問題場面がとりあげられる。これらの実際の問題をここに再録することや、問題順に考察することはやめにして、これらの場面にみられる問題点を要約してみると次のようである。

(A) 家族としての責任の無視、教育場面における権威への不合理な迎合の態度——たとえば、家の経済的援助を犠牲にしても、必ずしも必要でない学校の仕事をする(88)、家庭状況が自分の援助をせむ必要とする時でも学校はやめない(89)、自分や家を犠牲にしても学校の試合は休まない(2)、というようである。問題場面には、中学生に必ずしも妥当でないものもあったが、個の確立と自尊、家族成員としての責任、忠誠、愛情という見地から考えて、かならずしも望ましい態度とは思われない。人間をつくるよりも、学業成績のために、学校生活を優先させるような父兄のいづく気分が原因しているのかと思われる。

(B) 所属集団への忠誠心の低さ——たとえば、クラブの人からよろこばなければ、クラブをよくする努力はしない(92)、他人が自分の家族の批判をしても弁護する気がしない(91)というようである。

(C) 真実性の軽視と要領主義の態度——たとえば、実際の生活では正直は成功への道ではない(4)、家族には心配させない自分の生活の一部だけを話せばよい(90)、という。馬鹿正直を笑う社会的ムードが清純なるべき少年をしてこのような態度にしているのであろうかと考えさせられる。

(D) 友情軽視の態度——たとえば、自分の授業と友情が両立しない場合があれば、友情をすてる(96)、親友にでも家庭で困っていることは話さない(94)のような態度である。

しかし上記のことは、(+)態度に比較的低い比率(50%以下)を示している問題場面(50問中9問)に關することであり、他の問題場面では(+)態度を示す者が50%以上70%以下が14問、70%以上が27問という状態であるから、とくに憂慮すべき傾向とは考えられない。むしろ全般的には望ましい傾向と考えている。な

かでもとくに(+)態度を示す比率が著しく高く、(-)態度の比率が低い場面は、問題番号5, 13, 15, 19, 23, 32, 33, 36, 45, のような場面である。これらの場面から態度をみると、人がしており自分もやりたくても悪いとわかったことはしない(5)、他人に対し虚偽の批判をしている者には反省を求め(95)、嫌いな人でもその人の権利を尊重する(95)というように、道徳的勇気を強調している。また、自分のひきうけている仕事は遊びたくても完了し(93)、自分の責任でなくても教室の不整頓は進んで整頓し(92)、家や学校のことはたのまれなくても進んでする(93)、ような責任ある態度を志向している。さらに、試験では公正を(99)、クラブのために忠誠を(92)、強調し、家庭では自分のわがままをおさえる(96)態度の必要を認めているのである。

なお、態度未定の比率が比較的高い場面には、問題番号2, 6, 16, 20, 25, 26, 27, 38, 47, の問題がとりあげられる。これらについては、前掲問題を参照して考えていただく。

(二) 個人別考察(各個人の問題場面に対する態度)

1. 個人的診断の立場から考えると、(A)各人の各具体的場面に対する態度、(B)各人の類型別問題場面に対する態度、(C)各人の全問題場面に対する一般的態度傾向、の三段階の整理診断が予定される。ただし本稿では、(A)(B)にまで立ちいる紙面もなく、また必要もないので、(C)の立場から処理した結果について考察しておく。本調査の主要な目的が、葛藤場面に対決して示す態度の価値的な程度、個人差を調査できるかどうかを試みることにあるからである。

2. 全般的な反応(態度)傾向。調査問題50問題場面に対する各人の態度が、望ましい態度(+), 未定(0), 望ましくない態度(-)の三者にいかにかわっているかをしらべ、それに基づいて全被験者の態度別の問題数分散をみると、Table 4. のようである。各人は、50の各問題場面に対して、(+)(0)(-)のいずれかの態度を示しているわけであるが、(+)態度を46~48問に対して示した者は1名、次は43~45問に3名のように以下分散して、10~12問に(+)態度を示した者はただ1名である。(0)態度を示した者は、最高25~27問に1名、他はそれ以下に分散して、50問中ひとつも(0)態度を示さなかった者も20名いる。(-)態度は7~9の問題場面に対する者が最も多い。全被験者の態度別問題場面数平均をみると、(+)態度32.6問、(0)態度6.7問、(-)態度10.7問である。これは調査した問題場面50問の態度別分散であるから、比率とす

Table 4. 問題場面 (50問) に対する態度別問題数分散 (人数)

問題数	中央値	+態度	0態度	-態度
46-48	47.5	1		
43-45	44.5	3		
40-42	41.5	13		
37-39	38.5	21		
34-36	35.5	28		
31-33	32.5	30		
28-30	29.5	24		
25-27	26.5	18	1	1
22-24	23.5	8		2
19-21	20.5	5	1	4
16-18	17.5	2	8	12
13-15	14.5		11	20
10-12	11.5	1	13	36
7-9	8.5		33	53
4-6	5.5		36	21
1-3	2.5		31	5
0			20	
人数		154	154	154
平均		32.6	6.7	10.7
標準偏差		6.2	5.2	4.4
%		65.2	13.4	21.4

れば65.2%, 13.4%, 21.4%となる。この比率は、問題別に処理した前掲 Table 3. の態度別回答率と同じであり、これらの数値も、筆者の問題によって調査した場合における、中学生被験者の態度傾向を示すひとつの標準と考える。

3. 態度得点からみた個人差

全調査問題に対する態度から個人の総合成績を決定するために、態度得点の算出を試みた。各人が同意、やや同意、わからない、やや反対、反対の五段階スケールにしたがって態度決定したものを、前出 Table 2. の態度判定基準に対する一致、不一致の割合から、+2, +1, 0, -1, -2, のいずれかに点数化し、50問の合計点(代数和)÷50の計算をしたものが態度得点である。つまり各人の全問題場面に対する態度を総合したもので、代表値をもって示している。被験者154名について態度得点分散状況をみたものが Table 5. である。計の部分の歪度($\alpha_3=0.133$)尖度($\alpha_4=2.625$)からみても、全般的には比較的正規分布に近い分散を示している。この結果をみれば、本調査による態度得

Table 5. 態度得点分散

態度得点	男	女	計
1.7		1	1
1.6	1		1
1.5			
1.4	1	1	2
1.3	2	1	3
1.2	5	4	9
1.1	6	4	10
1.0	5	5	10
.9	8	7	15
.8	9	10	19
.7	13	14	27
.6	16	5	21
.5	8	2	10
.4	5	3	8
.3	6		6
.2	2	2	4
.1	3	1	4
0		1	1
-.1	1		1
-.2	1		1
-.3	1		1
人数	93	61	154
平均	.69	.79	.73
標準偏差	.34	.30	.33

点にはかなり顕著な個人差が現われ、態度の優劣を判定する手がかりが得られるように思う。男女の態度得点平均間には、1%以内の危険率で有意な差が認められ、女子の態度得点が高い。

Table 5. に記された。

$M \pm \sigma$ 男.69±.34
女.79±.30
計.73±.33

も本調査による中学生態度得点のひとつの標準と考えられる。もちろん本調査問題は、標準テスト化しているものではないが、個々の生徒の調査結果を、この態度得点平均値あるいはさきの Table 4. 態度別問題数平均値と比較することによって、一般的態度傾向を診断する場合におけるひとつの標準とすることはできるであろう。

(三) 信頼性, 妥当性の検討。今まで前掲態度調査問題による結果の概要を述べてきたが、その基礎となった調査資料が全く任意的回答からなり、その結果が現実生活や他の標準化テスト成績と無関係であるならば、この結果は誠に意味の乏しいものになる。この意味で、最後に結果の信頼性, 妥当性について検討しておこう。

1. 信頼性

問題場面への態度回答が、でたらめなものでなく、本人に固有なものであるかどうかを検討するため、中学二年被験者中の同一被験者51名に、3ヶ月の間隔(中に夏休みを含む)をおいて再調査してみた(寺井亮三君調)。その資料から、各人の50問に対する二回の回答間の一致、不一致の比率をしらべ、全員の平均を算出してみた結果は Table 6. の通りである。女子がやや一致度が高く、男女全員では、全問題場面の約68%が一致している。

Table 6. 二回の調査間の一致率(%)

	一 致		不 一 致	
	m		m	
男	66.5	(10.6)	33.5	(10.6)
女	69.8	(11.1)	30.2	(11.1)
計	67.9	(10.9)	32.1	(10.9)

なお各人の回答結果を、前述の態度得点によって示し、この態度得点による前回と再検査との間の相関係数を算出した結果は、

男 $r .616$ (C.R 3.26)

女 $r .783$ (C.R 3.59)

計 $r .704$ (C.R 4.98)

のように全般的に高い相関を示している。

また問題場面毎に、全員の態度別回答率を調査し、50問題について前後二回間の相関を求めるとTable 7.

Table 7. 各問題に対する態度別回答率の再検査相関

	(+) 態度		(0) 態度		(-) 態度	
	r	C.R	r	C.R	r	C.R
男	.851	(4.50)	.413	(2.19)	.846	(4.48)
女	.837	(3.84)	.659	(3.02)	.818	(3.75)
計	.912	(6.45)	.710	(5.02)	.905	(6.40)

のようである。(0)態度にやや相関の低いものが認められるけれども、全般的に著しく高い相関を示している。つまり、それぞれの問題に対して被験者が示す態度別比率は、問題により高低があるけれども、その高低は再調査においても同様で、変化しないことを示している。

Table 7. の結果は、つまりはそれぞれの問題場面に固有な態度別回答率があるということであるから、類似の条件下にいる同学年ならば被験者がことなっても、近似の結果が得られるはずである。こんな観点から、前掲 Table 1. に示した筆者被験者154名の態度別回答率と、寺井君が最近調査した同校、同学年被験者101名(ただし調査時が異なるから現状においては二年生と三年生である)の態度別回答率との間の相関係数を算出してみると、(+)態度 $r .928$, (0)態度 $r .754$, (-)態度 $r .820$ のように著しく高い相関が認められた。

以上の検討結果からみるならば、筆者の態度調査問題による回答は、決してでたらめで任意的な成績が現われているのではなく、かなり信頼性をもちうる結果

であることがわかる。

2. 妥当性

信頼性をもつということは、調査問題の生命であり、信頼性なくして妥当性をもつことはありえない。しかし妥当性つまり、めざすことがらをいかほど正確に測定しうるかの問題は、さらに重要な特質である。しかも信頼性の高いことが必ずしも妥当性の高いことを意味しないのである。したがって、本調査問題が果して各人の道徳的態度を十分にとらえているかどうかの妥当性を、あらためて検討しなくてはならない。もちろん心理学的、理論的立場からの妥当性は、できるだけ考慮して問題を作成し、調査方法の吟味をしたつもりであるが、現実の生徒の態度を妥当にとらえていなければ意味がない。このような見地から本調査結果の妥当性をたしかめる最もよい方法は、調査生徒の現実の生活や実際的な道徳的問題場面に対する態度などを綿密周到に継続的に観察してたしかめることである。しかしこのような検定方法は筆者の容易に実施しうる方法ではない。したがって重要な問題であるが、また極めて困難な面でもある。この意味で真の妥当性検討は今後の問題として残し、とりあえず安易な方法で得た二・三の結果を述べておこう。

まず Table 5. の態度得点にしたがって、全被験者を $M \pm 0.5\sigma$ と、その上下の三群にわけ、各群の二年時における行動記録および学業成績(指導要録記載の総合結果)を調査した結果はTable 8. 9.の通りである。

Table 8. 態度得点と教師行動評定との関連(人数)

態度得点	行動評定			計
	A	B	C	
1.0 以上	12	24		36
.6 ~ .9	25	53	4	82
.5 以下	1	30	5	36
計	38	107	9	154

Table 9. 態度得点と学業成績との関連(人数)

態度得点	学業成績					計
	5	4	3	2	1	
1.0 以上	6	13	17			36
.6 ~ .9	9	21	45	7		82
.5 以下	1	5	18	12		36
計	16	39	80	19	0	154

指導要録に“C”と評定されている者9名は、ともに態度得点の低い方に、“A”と評定されている38名は態度得点の高い方にかたよっている。学業成績との関連にも類似した傾向が認められる。行動評定に影響する条件にはいろいろなものがあり、学業成績の優劣や、さきの好印象が後光効果 Halo effect をおよぼしていることも考えられる。しかし教師の行動評定において、道徳的に望ましい態度をもつ群が高く、望まし

くない態度をもつ群が低く評定されているという事実からみて、本調査結果に現われた個人の道徳的問題場面に対する態度の高低と現実の実践行動との間に、なんらかの相関があることは否定できない。

次に拙著道徳性検査⁽³⁾を同一被験者を実施し、その成績を態度得点群別（前表と同じ）に整理してみた結果は、Table 10. の通りである。拙著道徳性検査は、道徳的価値判断を中心とした80問題から構成され、全

Table 10. 態度得点と道徳性テスト得点との関連

テスト 性別 要項 態度得点	総 偏 異 度				偏 差 値			
	男		女		男		女	
	m		m		m		m	
1.0 以上	89.1	37.6	94.2	40.3	54	8.9	55	7.5
.6 ~ .9	103.5	40.2	115.8	43.5	50	10.5	50	9.7
.5 以下	118.7	35.8	120.3	38.2	47	9.6	49	8.8

図 6,247 人により標準化している。総偏異度は、20の心理的等現間隔尺度（サーストンスケールを参考とした）にしたがって各人の品等した結果が、尺度値（標準値）からかたよった度合の総計である。したがって総偏異度はその数値が大きいほど成績が低い。この結果について、態度得点 1.0 以上と .5 以下の両群間の差の有意性検定をおこなってみると、男は 1% 以内、女は 5% 以内の危険率で有意である。真に望ましい態度は、明確な価値判断力あるいは道理の感覚に基づかなくてはならないと考える時⁽⁴⁾、この結果はまさに当然のことと思われる。

なお、同被験者中の一学級 54 名により、別に作成した問題を用いて、葛藤に対決して態度を決定する場合における内面の心理的機制を、探る調査を行なってみた。この結果でも、態度の望ましくない群には、友情・忠誠にこだわって正直・責任・道徳的勇気を無視しているような、葛藤に正しく対決していない内面的矛盾の傾向がより多く認められる⁽⁵⁾。しかしこの検討は被験者が小数であるばかりでなく、なお、かなりの紙面を必要とするので、これ以上の報告は割愛しよう。

以上の諸点から、本調査問題によってとらえた道徳的態度は、実践行動、価値判断力、態度決定時における内面のメカニズムなどと、かなり関連をもっていることが認められた。これらはいささか本調査問題の妥当性を示しているものといえるが、満足されるものではない。この十分な検定は今後の問題としたい。

5 要 約

本稿は、道徳的問題場面に対決した時に示す態度の測定にかんするひとつの試みと、その結果の報告である。

作成した問題そのものは、表現方法、内容などに、なお検討の余地はあるが、その測定結提には高い信頼性と、かなりの妥当性を認めた。各問題の統計的分析と改訂、見本被験者の増加によって、態度測定問題となしうる見通しをもつことができた。

その問題によって本被験者中学二年 154 名の範囲内で得られた結果は次のようである。

1. 問題場面それぞれに対する態度を、個人別または特定集団別にながめる時、生活指導上の参考となる態度評価の手がかりが得られることを認めた。
2. その際の各問題場面に対する態度のひとつの標準となる比率は第 1 表であり、全問題場面に対する総合態度の標準となる比率は第 3 表である。
3. 個人の全問題場面に対する態度得点から、各個人の評定が可能である。この時のひとつの標準は第 5 表である。

参 考 文 献

- 1) 大平勝馬、道徳的葛藤場面における当為水準と現実水準とのずれについて、日本応用心理学会 27 回大会発表論文集、シンポジウム(2)、p. 197 1960.
- 2) 大平勝馬、道徳意識と行動の“ずれ”の生ずる

根拠とその指導, 教育心理 9 卷 1 号, p.14—1961.

3) 大平勝馬, T式道徳性検査および同手引, 文心堂1955

4) 大平勝馬, 道徳教育の研究—道徳性の発達とそ

の形成の心理, 新光閣p.39—1960.

5) 大平勝馬, 葛藤に対決する道徳的態度の発達の研究, 日本心理学会第25回大会発表論文集p.204—

1961.

“The measurement of moral attitudes taken to conflict situations.”

(Abstract)

Katsuma OHIRA

This paper is on the measurement of the attitude which pupils take when confronted with moral conflict situations.

The test items which indicate moral situations are not necessarily satisfactory, but results of the measurement proved to be reliable and valid, and I believe that these test items can be proper test questions to measure the attitudes taken to moral situations, if they are statistically inspected and revised and more data are obtained.

The results of my test given to 154 second graders of a middle-school are as follows:—

- 1) We got some clue for evaluating moral attitudes of pupils in relation to their life guidance, inspecting the attitude confronted with each test item of each pupil or group.
- 2) The standard ratio of attitude to each problem situation is shown in Table I, and the standard ratio of general attitude to all the situations in question is shown in Table III.
- 3) We can evaluate the each individual by the general score of attitude taken to all the moral situations in question. The standard score of general attitude is shown in Table V.